

事件3 「愛猫組合」

1

ギユイイイイイイーンー

ベーカー街222Bを、けたたましい騒音が埋め尽くしていた。

騒音を出してーいや、「音楽」を「奏でて」いるのは、アーサー・ホームズだ。楽器はギター。ただし、当然ながら通常のギターではない。なんでも、弦の振動を電気信号に変換して増幅させているらしく、音はギター本体ではなく、コードで繋がれた電気拡声器から鳴り響いていた。

アーサー曰く、《Eギター》。慣れるまでは耳障りな騒音以外の何ものでもないが、慣れればその独特の音が奏でるメロディーも聞き分けられるようになる。差し当たり、即興で弾かれている楽曲擬きにタイトルを付けるなら……。

「……『鬱憤』……というところか」

爆音で微かに震動する紅茶のカップを手に取りながら、コナン・ワトソンはつぶやいた。無論そのつぶやきは、ギターに掻き消されて相棒の耳には届かなかった。

ロジャー・ステイプルトンの事件から一週間。

結局、アーサーとコナンは依頼人の父親を死なせてしまった上、クラウス・レストレードからたっぷりと絞られる結果となった。アーサーの元に持ち込まれる依頼は失敗することも少なくないが、これほどの大失態は初めてかもしれない。それも、九割方上手く片付きかけていた局面からの失態だ。アーサーが腐るのも無理はなく、コナンにせよ大いに不本意だった。

しかも、原因が原因である。

あのときアーサーは意識がなかったため、《ジャック・ザ・ナイトメア》の集団を目撃したのは、コナンだけだった。無論、アーサーにもクラウスにも、自分が目にしたことは報告している。ただ、自分が目撃したことを証明する手段はなかった。ロジャーの死体がせめてもの証拠だが、今回彼らは現場に仮面を残していないのだ。

いや、仮面はあるにはあったのだが……。

「そういえば……アーサー？ 馬車から見つかった仮面。あれは結局、本物の仮面だったのか？」
コナンの質問に、アーサーがギターを鳴らす手を止めた。

ロジャーが乗っていた馬車からは、彼の持ち物と見られる布袋が発見されている。中には金銭と着替えの他、例の仮面が入っていたのだ。それも、二枚。

「……本物だったよ。結局、ロジャー・ステイプルトンがあああの仮面をどこから入手したのかは、わからずじまいだがね」

と、弦を調整しながら、アーサーが答える。

「もつとも、君が見た『集団』を考えると、あるいは彼も《ジャック・ザ・ナイトメア》の一人だったのかもしれないな」

真相は闇の中だが、とアーサーは独りごちた。その言葉にはどうしても、悔しさが滲んでいくように聞こえる。

コナンはアーサーを真顔で見つめた。

「どうして信じる？」

「ん？ 何を？」

「俺の証言だ。レストレード警部は半信半疑だったぞ」

「ああ、そんなことか」

アーサーは笑いながら、ジャンツ、とギターを鳴らした。

「《ジャック・ザ・ナイトメア》複数犯説は以前からあったし、僕も有力と考えていた。その説を裏付ける証言が得られたってことさ。そもそもー」

とアーサーは、少し意地悪く笑ってみせる。

「君の脳から作り上げた幻覚にしては、ずいぶん出来が良かったからね。まったく、肝心な時に気絶とは！ 君のピンチを救った結果だぞ？ 次からはピンチに陥る前に片を付けてくれ」

「ー努力する」

コナンは辟易として堪えたが、そのあと堪えきれずに、小さく笑った。

《Eバイク》で突っ込んだときのアーサーの顔が見られなかったのは一生の不覚だ。きつと、半べそを掻いていたに違いない。半ソブリン賭けてもいい。

「もつとも、ロジャー・ステイプルトンが《ジャック》だったかどうかは、まだ未確定だ。と言うより、自分で口にしておいてなんだが、僕の感触としては『違う』気がする」

「理由は？」

「君が見た集団は、かなり統制が取れていたんだろ？ 彼の言動を振り返ると、いささかそぐわない」

「まあ、あくまで俺の印象だがな」

「君の印象だけじゃないよ。現に、彼の犯行は自動機巧人形オートマタを用いたもので、これまでの《ジャック》の犯行とは、やり口がまるで異なっている」

「しかし、彼が夜に歩き始めたのは、《ジャック》の事件が知られるようになった時期と重なると言ってなかったか？ それにベリル嬢の、コートや手袋に汚れが付着していたという証言

がある」

「ああ、その事で君に伝え忘れていたことがあった」

とアーサーは思い出すように言った。

持っていた《Eギター》を一度置いて、

「まず、ベリル嬢の話を正確に思い起こすと、『汚れ』というのは『すり切れ』『穴開き』『油の染み』『焼け焦げたあと』だ。これらは、自動機巧人形の試運転で付いたものだと思像できる。問題は『血痕』だが、ベリル嬢にはそれが『人の血』かどうかまではわからなかったはずだ。

気になって調べてみたんだが、実は彼の夜歩きが始まった時期以降、巨大な刃物で切られた野良犬の死体が定期的に見つかっている。生憎死体の確認はできていないが、話を聞く限り、自動機巧人形の被害者と同じ手口に思える。つまりロジャー・ステイプルトンは、夜な夜な自動機巧人形を使って野良犬を『試し斬り』していた可能性が高い」

「……酷いな」

「まったく。ただ、こうした行動を鑑みても、彼が《ジャック》だったとは考えにくいわけ
な」

「しかし……ロジャーが《ジャック》の一人でなければ、彼が本物の仮面を所有していた理由に説明が付かないだろう?」

コナンが言うと、それまで饒舌だったアーサーが、洪面で口を閉ざした。アーサー自身、最初に口にはしているのだ。「あの仮面をどこから入手したのかは、わからずじまいだ」と。

「……またしても、仮面、か……」

「またしても?」

「忘れたのか? クロエ・ノートン殺害の真犯人だった、宝石商のウィリアム・クラム。彼も《ジャック》の犯行を装った偽物だったが、彼の店に隠されていた割れた仮面は本物だった。そして、やはり出所が不明のままだ」

「……つまり、偽《ジャック》のほずの二人が、なぜか本物の仮面を持っていたてことか?」
「ウィリアム・クラムの方は、『彼が所持していた』のかは怪しいけどな。ロジャーにせよ、彼が自ら仮面を手に入れたとは思えない。何者かの手によって『渡された』と考える方がしっくりくる」

「……それこそ、本物の《ジャック》からか?」

「x」

と、一度言葉を濁して、アーサーは再び《Eギター》を持ち直した。

ギューイーン、と弦を掻き鳴らしつつ、

「ウィリアムの方はわからないが、ロジャーの交友関係は極めて限定されている。そして……」

少なくとも、あの人当たりの良い古物商は、髪かみの長い若い男おとこではなかった」

「ああ、ベリル嬢ぢやうが言っていた、謎めいの訪問客か」

「ロジャー・ステイプルトンの性格が一変したのは、その訪問者と会ったあとからだ。訪問者こそが《ジャック》の一人だったのかもしれない。もともと、現時点ではなんの根拠もないが」

「気になるのは確かだな」

「それに、怪しい人物というなら、他にもいる」

「誰だ？」

「身近な人物さ。何しろ……あのタイミンたいみんグだ。連中は、まるで僕たちがロジャーを捕縛するののがわかっていたように、ピンポイントのタイミンたいみんグで現れた。内通者がいた可能性は高い」

「内通者だと？ おいおい、アーサー？ まさか、《ジャック》が俺たちを見張ってたつて言うのか？」

「少なくとも、何かしらの情報がなければ、あんな動きはできるはずがない。敵が組織だつて動いているとすれば、なおさらさ」

「じゃあ、誰なんだ？ その内通者は」

「生憎なげこちらにも証拠はないんだ。迂闊うくわんなことは言えないよ」

そう告げて、アーサーは会話を打ち切ると、《Eギター》をギャンギャンと鳴り響かせた。

さつきまでよりは多少前向きなメロデーだ。コナンはビリビリと皮膚が震えるのを感じながら、もう一度紅茶に口を付けた。

正直気になるが、こういふときアーサーの口はいつもより硬くなる。聞いても答えてはくれないだろう。

と、そのときだ。

突然足下あしもとに感じた、ぬるりとした柔らかな感触に、コナンは思わず声を上げた。

「な、なんだっ！？ ーって、ワガハイ？ なんでここに」

テーブルの下を覗くと、そこには丸くなった一匹の猫がいた。

白、黒、茶の三色の毛が生えている。三毛猫みけねこだ。猫はコナンを見て、挨拶するかのようように、ニャア、と鳴いた。

その直後、リビングのドアがドンドンと叩かれる。

「アーサー君！ コナン君！ いるんでしよう？ 開けて下さい！」

若い男の声だった。「もう開いてるぞ！」とコナンが応じたが、ドンドンとノックは止まない。ギターの音で聞こえないらしい。コナンは仕方なく立ち上がって、リビングのドアを開けた。

ドアの前には、黒髪黒目のひよろりとした青年が立っていた。

東洋人にしては生っ白い顔で、見るからに不満そうに眉根を寄せている。下手をするとコナ

ンより若く見えるが、これは東洋人ならではの童顔故だ。歳はコナンより二つ上の二十三歳である。

スタンドカラーシャツの上に紺の着物、首には襟巻き。下は袴に足袋と下駄という、コナンの目にはいかにも珍妙な格好をしている。ニッポンの学生や見習いには一般的な装いで、書生服と言っうらしい。

夏目銀助。

コナンたちが住む建物の一階部分、つまりベーカー街222を借りているご近所さんだ。ロンドンでは珍しい日本人である。

「うわっ。ドアを開けたら、さらに酷い！何をやってるんですか、コナン君？」

「……『君』は止めてくれ」

「ああ、そうでしたね。失礼。でも、いまはそれより、この騒音ですよ。なんだかいつになく激しくありませんか？ 同じ部屋にいて、よく頭がおかしくなりませんね」

「申し訳ない。アーサーも色々溜まっててな」

「だからって、さすがに非常識ですよ？ こんな騒音を出すために、桜石を上げてるわけじゃないんですからね？」

コナンが部屋に通すと、銀助は精一杯大声を張り上げた。

「アーサー君っ？ もう少し、音、落として！ そもそも、どれだけ増幅してるんですか、これ？」

「誇らしいだろう？ 銀助がもたらしてくれたサクラライトが響かせるサウンドだ！」

「だから、私の桜石を、こんなことに使わないでもらえますか？ 桜石の普及と発展のためだつて言うから渡してるんですからね？」

銀助は糸目を吊り上げて言った。ちなみに桜石というのは、サクラライトの和名である。

「多様な発明あつてこそその普及と発展ではないか！ 実用性だけでなく、文化的でもある！」

「この騒音が文化的なら、大英博物館はとくにパンクしてますよ！ いいから一回、演奏を止めて下さい！ もう桜石上げませんよ？」

銀助が大声で怒鳴るとーと言つても、あまり怒っているようには見えないのは、彼がどことなく品が良かったためだろうーアーサーは渋々演奏を止めた。

止めると言われて素直に止めるなどアーサーには実に珍しいが、これには理由があった。

アーサーの発明の多くは電気工学に基づく物で、その開発には近年注目されている超伝導物質サクラライトが欠かせない。だが、実はこれは、欧州では「賢者の石」などと呼ばれる、極めて希少な鉱物なのだ。そして、銀助の母国であるニッポンは、そのサクラライトの一大産出国なのである。

本来なら入手が困難なサクラライトを、アーサーは銀助から、同じ屋根の下というよしみで、格安で融通してもらっている。そのため、傍若無人な彼も、この色白で病弱そうな東洋人にだけは頭が上がらないのだった。

……いや、それも表面だけで、往々にして上げていることが多い気がするが……。

「相変わらず度量が狭いな、銀助。そんなことだから、神経衰弱などなるんだ。せっかく留学に来ているのだから、もっと柔軟に、西洋の文明を受け容れたまえ」

「あんな騒音、ロンドンでも他に聞いたことはありませんよ」

「それが狭量だと言うのだ。確かに古典的クラシックな音楽ではないが、若者たちの間では、次世代の画期的音楽だと話題騒然なんだぞ？」

「え、そうなんですか？ いまのやかましいのが？」

「そうだと！ 特に技術提供したリヴァプールでは、熱狂的人気バンドも生まれている。あれは早晚、世界的ブームを巻き起こすに違いない。ニッポンにもハッピーを着て凱旋するかもしれないぞ？ 銀助もいまの内に、サクラライトの提供者として取材用のスピーチを考えておいた方がよい」

「そ、それは大変だ。日本語じゃ駄目ですよね？ まだまだ発音が不安ですし、練習しておかないと！」

「……アーサー。またそうやって、銀助に適当なデタラメを吹き込むんじゃない」

満更でもなさそうな銀助を余所に、コナンは洗面でアーサーを諫める。

イギリスに留学してくるだけあって銀助は良家の子息らしいのだが、世故長けた一面がある一方、妙なところで世間知らずなのだ。サクラライトの件にせよ、アーサーに良いように騙されている風には見えない。

「それより銀助。こいつ」

「あ、ワガハイ。見ないと思ったら、こんなところに居たんですか」

そう言っつて、銀助は笑顔で、コナンが差し出した三毛猫を抱き上げる。この猫——ワガハイは、銀助がニッポンから連れてきた飼い猫なのだ。

「駄目ですよ、ワガハイ。こんなところに入り浸ってたら、誰かの飼い犬の代わりに実験台にされてしまいますよ？」

「……否定しづらいのが辛いところだ」

「そんな愛らしい猫を実験台になどしない！ それより、回収した、例の自動機巧人形オートマトンはどうだったんだ？ レストレード警部から意見を聞きたいと呼び出されていたはずだ」

アーサーの詰問に、「ああ、あれ」と銀助。

喉を鳴らすワガハイを両腕に抱えつつ、

「見ましたよ。まさかロンドンでお目に掛かるなんて思ってもみませんでした。まあ、私も特別詳しい訳じゃありませんけど、あちこち改造されてたのは間違いないですね。そもそも、対人用の《ナイトメア》とはいえ、基本的には補助用サブポトなんです。主を守るのが本分であって、《ナイトメア》本体が日本刀を振り回して人殺しなんて、日本じゃあり得ない」

「……あれが補助専用サブポトって、ニッポンのサムライは、どれだけ化け物なんだ……」

コナンがうんざりしながら言ったときだ。

また、リビングのドアがノックされた。

「ミスター・ホームズ？ お客様です」

ターナの声だった。おや、とコナンが席を立ち、ドアに向かう。

一方、アーサーはわずかの間、軽く目を瞞くらっていた。驚いたような顔でドアを振り返る。が、そうしたアーサーの仕草には、誰も気付かなかった。

コナンがドアを開けると、ターナが入って脇に移動し、続いて、ステイプルトン家の姉妹が部屋に入ってきた。

喪服に身を包むベリルとローラに、コナンは慌てて姿勢を正す。彼女たちに会うのは、あの夜が開けた翌日以来だ。しかも、あのときは市警ヤードの手続きなどもあり、ごく事務的な会話を交わすことしかできなかった。

「ミス・ステイプルトン。その……この度は……」

悔やみの言葉を口にするコナンに、ベリルが静かに首を横に振った。

「……ありがとうございます、ワトソン様。ですが、どうかあまり気に病まないで下さいませ。父のことは、誰がどう見ても自業自得でございます。父の凶行を止めて下さっただけでも、私は感謝しています。あのまま父の罪を見過ごしているより、ずっと救われました。今日はご挨拶と、その感謝をお伝えしに参ったんです」

ベリルは気丈に応えた。その毅然とした態度は、ロジャーなどより、余程貴族らしい。

「ですが……」

と、視線が姉の隣でスカートをつかんでいるローラに向かった。

コナンたちに依頼してきた少女は、以前とは異なり、どこか暗い影を引きずっているように見えた。

だが、それでもコナンの顔を正面から見上げると、自らの意思で微笑んで見せた。

「いいんです、ワトソンさん。事件のことはお姉ちゃんや、あのレストレードって言う警部さんから聞きました。お父様がみんなに内緒で、悪い事をしてたってことも……」

「それは……」

ロジャーの凶行は幼い娘に聞かせるには酷な内容だ。ちらっとベリルを伺うと、彼女は無言

のまま小さく頷いた。おそらくは具体的なことは伏せ、刺激の少ない形で説明しているのだろう。

「すごく悲しいけど、私にはお姉ちゃんがいるし……私、お父様が天国に行けるように、お父様の分まで良いことを一杯します」

ローラの台詞と真っ直ぐな眼差しに、コナンは胸を打たれて、言葉を失った。

ベリルが誇らしそうに妹の頭を撫でる。

「幸いなことに、まだ蓄えはありますし、すぐに生活に困ると言うこともありません。何人かの使用人は離れていくことになりましたが、残ってくれる者もいます。これから私とローラ、残ってくれた者たちで、改めて再出発することになりそうです」

そう告げるベリルの横顔は、悲劇の傷跡を残しつつも、どこか晴れやかに見えた。

コナンの中で、健気な姉妹の姿が、かつての自分たちに重なる。

コナンの脳裏に、亡き兄の記憶が甦った。

兄はいつも前向きで頼もしく、厳しいと同時に優しくかった。確かに、この姉がいるならば、幼いローラも大丈夫だろう。

「それでも、謝罪はさせて下さい。俺たちはお二人の依頼を達成できなかった。申し訳ありません」

コナンの謝罪に、ベリルではなくローラが答える。

さつきよりは自然な笑みを浮かべて、

「それなら、もういいんです。ホームズさんに十分謝ってもらえましたから」

「アーサーに？」

「はい。お父様が死んでしまったって聞かされた夜、私、ずっと寝室で泣いてたんです。そうしたら、突然窓がノックされて、驚いてカーテンを開けたら、ホームズさんが」

「ええっ!？」

もちろん、コナンは初耳だ。驚いてアーサーを振り返れば、相棒は同じタイミングで顔を逸らしていた。

「ホームズさん、たくさん、たくさん、謝ってくれてーそれに、私が寝られるまで、側でずっとお話ししてくれたんです。私、とても嬉しかった」

「いや……しかし、それは……」

コナンが呆れていると、ベリルもクスリと小さく笑う。

「あのかきは驚きました。朝になってローラが持って来た紙に、夜分失礼したとホームズ様の書き置きがあつて。ローラから話を聞き出すまでは、何事かと思いましたが」

「……でも、申し訳ない……」

なんとも非常識な話だ。コナンはもう一度後ろをにらんだが、アーサーは相変わらずそっぽを向いたままだった。

だが、少なくともアーサーも、依頼人に対して申し訳ない気持ちはあったということだ。

コナンはローラの目線に高さまで腰を落として、

「では、次は俺の番だ。何かあったら、すぐに電報を寄越して欲しい。ローラ嬢のために駆けつけることを約束する」

真面目な顔でそう言うと、ローラはもう一度笑って「ありがとう」と答えた。礼を言うのはこちらの方だ。胸に抱えていた鬱屈が、少し楽になった気がした。

と、コホン、と白々しい咳払いが聞こえた。

「えーと……コナン？ 私は席を外した方がいいでしょうか？」

「あ、居たな、そう言えば」

「ちよつと」

ワガハイを抱きかかえたまま居心地が悪そうにしていた銀助が、コナンの返事に眉根を寄せた。

一方、

「あ！ 猫ちゃん！」

と、いま気がついたのか、ローラが子供らしい歓声を上げる。フアンの呼びかけに応えるように、ワガハイがニャアと鳴いた。

「ちようどいい。銀助。君もワガハイをローラ嬢に献上したまえ。せめてもの詫びだ」

「私は関係ないでしょう！？ ーあ、いや、もちろん、いいんですよ、お嬢さん。ほら。この子は大人しいから、抱きかかえても大丈夫です。ただ、ちよつと重いから気を付けて」

銀助がワガハイを渡すと、ローラは目を輝かせて猫を抱きかかえた。慣れない手つきでぶらりと体がぶら下がったが、ワガハイは気にした様子もない。飼い主に似てか、猫の癖に警戒心に乏しいのだ。

「……ときに、ミス・ベリル・ステイプルトン。使用人の何人かが家を出たと仰っていましたね？」

アーサーの唐突な質問に、「はい」とベリルが瞬きしながら返事をした。

「と言いましても、今回の事件で揉めたわけではありませんよ？ 前々から話し合っていたことです。お恥ずかしい話ですが、今後のお給金のこともありましたので」

「その中には、例の記録を見つけてきたメイドも含まれていますね？ 最初に、僕たちにお茶を持って来た彼女です」

「い、いえ。今回辞めてもらったのは、他にツテのある高齢の使用人たちです……彼女でしたら、いまもまだ屋敷で働いてもらっています」

「いまも？ まだ？」

なぜか肩透かしを食らったかのように、アーサーは目を丸くした。ただベリルは、「ああ、でも……」と話を続ける。

「あの子に関しては、少しおかしなことがあります……」

「それは？」

「いえ。大したことではないのですが……あの事件の翌日に、あの子を呼んで褒めたんです。よく記録を見つけてくれたと。でも、あの子、自分が記録を見つけたことを覚えていなくて」

「……ほお？」

「それに、思い返すと、しばらく前から、少し様子がおかしかった気がします。元々大人しい子でしたが、ここしばらくは、どこか上の空になることが多くて。それも、本人は自覚していませんでした。いまは以前と変わらなくなりましたが……まるで、一時的に人が変わっていたみたいでした」

ベリルも当惑しているようだ。アーサーは鋭い視線で、じつとベリルの話を聞いていた。

「……今度また会わせてもらっても？」

「もちろん構いませんが……彼女が何か？」

「申し訳ない。上手く言語化できないのですがー」

それは、アーサーには珍しい台詞だった。

言葉を探す沈黙のあと、ふと、アーサーは視線をドアの方向に向けた。

ターナが慌てて、

「ごめなさい。台所のことを忘れていたわ。失礼しますね？」

そう言っつて、ターナが部屋を出る。

すると、ちょうど入れ替わりに、一人の少女が飛び込んで来た。

ハドソン家三女のサラだ。

「ローラちゃん、来てるのっ？ いらっしやい！」

「サラちゃん！」

サラとローラが間にワガハイを挟んで抱き合った。ローラも今度はきやあきやあと年相応の声を上げる。妹の様子に、ベリルがそっと目元を拭うのが見えたが、コナンはあえて見ない振りをした。

子供たちの微笑ましい姿に相好を崩しつつ、コナンは相棒へと向き直る。

「アーサー。いま話してたメイドの件だが、何がそんなに気になるんだ？ そう言えば最初に屋敷から帰るときもーアーサー？」

「……………」

「おい、アーサー？ どうした」

アーサーはじつとドアの方を見たまま、心ここにあらずと言った風だった。コナンの呼びかけに我に返ったのか、「ああ」と生返事をする。

「すまない。何か言ったか？」

「だからメイドのローまあ、あとでいいさ」

この程度の一方通行な会話なら、いつものことだ。コナンは肩を竦めた。

「あ、そうだ！ 銀助ちゃんがいる、ちようど良かったわ。ねえ、これ見て、これ！」

そう言って、サラがエプロンのポケットから折り畳まれた紙を取り出した。銀助が受け取って広げてみる。

『我ら《愛猫組合》が、美猫、珍猫を、大募集！

《ロンドン・キャット・コンテスト》開催決定！

貴方の愛猫を、ぜひご披露下さい！』

「はあ……キャット・コンテスト、ですか？ 開催はロー明日？ また急ですな」

サラが見せたのは、イベントを告知している新聞広告の切り抜きだった。飼猫の愛らしさを競うコンテストの物らしい。コナンは眉間に皺を寄せた。

愛犬家の多いイギリスでは「ドッグ・コンテスト」なら珍しくないのだが、「キャット・コンテスト」というのは聞いたことがない。なんだそれ、という感想しか出て来なかったが、コナンと違いローラや銀助はローまた、意外にもベリルも——興味深そうに切り抜きを眺めている。

「猫の可愛らしさを競うコンテストなんだって。でね？ 珍しい猫ほど、評価が高いんだって！

そこで、ワガハイだよ！」

サラは自信満々にローラが抱きかかえるワガハイを指さした。

「ワガハイみたいな猫、他に見たことないもの！ スマートな美人さんって感じじゃないけど、ぼっちゃりしてるのもチャームポイントだと思うの。銀助ちゃん、出てみない？」

「はあ……要するに猫の品評会のようなものでしょうか。言われてみれば、ロンドンでは三毛猫なんて見ないですが……」

「この子がコンテストに出るの？ すごいです！」

「良いのではないのでしょうか？ 愛嬌のある猫ですし、この子の毛皮みたいな模様は、これまで見たことはありません。高評価が得られるかもしれませんよ」

戸惑っていた銀助は、ステイプルトン姉妹の台詞を受けると、改めてしみじみとワガハイを見つめた。人間たちから注目を浴びる三毛猫は、我関せずと欠伸している。

「優勝したら賞金ももらえるそうだよ？　ね、銀助ちゃん。ワガハイ、参加させてみようよ！」

「ど、どうなのでしょう。外国人の私が出ても良いものなんでしょうか」

「そんなの全然平気だよ！　不安なら、みんなで行けばいいんだし。トーヨーの猫だって、かえって注目されるかもしれないよ？」

「むむ……確かに三毛猫と言えば、ニッポン・キャットの代表格……ワガハイが優勝すれば、これは日本の誉れ……かも……」

銀助は次第に頬を紅潮させる。どうやらその気になって来たらしい。「みんなで」というのは、ひよっとして自分たちも含まれるのだろうかとかとコナンはアーサーに視線を投げたが、相棒はただ物思いに沈んだままだった。

「そうと決まれば、さっそくブラッシングしてあげようよ！　ワガハイに優勝してもらって、みんなで賞金をもらおう！」

どうやら賞金も自動的に山分けになるらしい。気合い十分のサラに釣られて、銀助もエイエイオーと拳を上げていた。騒がしい人間たちに囲まれる中、ワガハイはもう一度、ニヤア、と鳴いた。

*